



## Report

# 口腔がんの深刻な実態と歯科衛生士の役割を再認識

(一社)口腔がん撲滅委員会主催  
「地域の口腔がんを考えるシンポジウム」に参加して

さる5月7日(日)、北海道歯科医師会館(北海道)において、「地域の口腔がんを考えるシンポジウム」([一社]口腔がん撲滅委員会主催)が開催され、道内の歯科医師・歯科衛生士ら103名が参集しました。定員を超申込があったとのことで、関心の高さが伺えました。

初めに、座長の山下徹郎先生(恵佑会札幌病院顧問)より、日本とアメリカの口腔がん死亡率を比較したうえで、日本は医療先進国でありながら、唯一死亡数が増加している国であること、特に北海道は死亡数が多い地域であることなどが話されました。また、口腔がんの20%は早期発見で治療できることができることが見込まれるので、地域の歯科医院での発見がとても重要であることや、2週間経っても口内炎などの症状の軽快がなければ、早期に地域基幹病院の口腔外科に紹介するのが望ましいこと、さらに口腔ケアを行う機会が多い歯科衛生士は、舌、粘膜を含めた口腔内全体を診る目を養うことが大切

であるといった話がなされ、自分たちの役割の大切さを再認識しました。

次に、本委員会の代表理事でもいらっしゃる柴原孝彦先生(東京歯科大学口腔顎頬面外科学講座主任教授)の基調講演が行われました。まず、口腔がんの3症例の治療過程が説明されました。そのうちの1症例において、最初に口腔内の異変に気づいたのは歯科衛生士だったとのことで、常日頃から口腔内全体をよく診る習慣が身についていたことや、普段から院長がそのように指導していたことが早期発見につながったことなどが紹介されました。また、アメリカでは、男性だけでなく、若い女性に対しても、検診を受けるよう周知され、意識改革ができていることに触れたうえで、日本でも、一次予防として、国民への啓発活動や教育、二次予防として、早期発見・治療のために検診を実施することが必要であると強調されました。さらには、視診・触診に加え、あらゆる角度から診ることが大切であるとしたうえで、千葉市

で行われている口腔がん個別検診の委託事業や、口腔用蛍光観察装置、口腔がん・口腔内検診システムなどに関する紹介があり、「自分たちの地域でもこれらを活かせば」と感じました。

その後、口腔がん撲滅委員会から、活動目的として、口腔がん検診の普及と、歯科医療の価値を欧米並みに向上させること、その手段として、早期発見のための機器や仕組みの紹介がされました。また、新しい検診システムを近々正式に稼働させる予定であることが詳しく説明されました。

最後に、先の演者の先生方に、牧野修治郎先生(北斗病院歯科口腔外科部長)、永易裕樹先生(北海道医療大学歯学部生体機能・病態学系顎頬面口腔外科学講座教授)、武藤智美先生([一社]北海道歯科衛生士会会长)が加わり、各々の活動と今後の取り組みなどが発表された後、会場の受講者も交えた意見交換や、活発な質疑応答が行われ、閉会となりました。

本シンポジウムに参加して、歯科衛生士の役割は非常に大きいこと、基本的なことですが、患者さんの背景にも耳を傾けたうえで口腔内全体を診ること、得た情報をスタッフで共有し基幹病院と連携していく重要性などを再認識できました。そして、シンポジウムのキャッチコピーのように「私たち歯科衛生士に救える命がある!」ということを強く感じる1日となりました。

今後、本シンポジウムは各都道府県で開催されるそうですので、皆さんも参加されてみてはいかがでしょうか。



小林元子  
Motoko KOBAYASHI  
歯科衛生士  
一般社団法人  
北海道歯科衛生士会  
事務局



ディスカッションのようす。受講者も交えた意見交換や質疑応答が行われた。